

に十分な配慮をした。

11. Cotard 症候群の病像を呈した 68 歳女性の 1 症例

¹⁾医療法人慈心会 村上病院

○古野 英司¹⁾, 渡辺 厚¹⁾, 熊切 力¹⁾
村上 敦浩¹⁾

【緒言】 Cotard 症候群（以下 CS）は 1880 年にフランスの精神科医 Cotard が「不安メランコリーの重症型における心気妄想について」報告した症例から発展した否定妄想や反対症などを特徴とした症候群で、うつ病や統合失調症や器質性精神障害などに認められる。自殺や、反対症による拒絶から拒食・拒薬を呈し、危険な状態に陥るため治療上無視できない。難治性で、抗うつ薬や電気痙攣療法が勧められている。今回、CS の病像を呈したが、短期間で改善した 1 例を経験したため、考察を加えて報告する。本報告は、個人情報に注意し本人より同意を得た。

【症例】 68 歳女性。精神科受診歴なし。こだわりのある性格、音楽講師で独居。三姉妹の次女で妹はうつ病で自死された。X-1 年、不仲の父親が肺炎で亡くなってから、不眠、脚のしびれが発現し整形

外科受診するが異常はなかった。X 年 7 月に不眠、拒食、不安で当院受診された。抗うつ薬を処方されたが服薬しなかった。8 月、拒食と便秘が継続するので姉が救急要請した。器質的異常なく、当院に搬送され入院となった。

【経過】 入院時「食べると胸のあたりで食物が止まってしまう、後はぐちゃぐちゃになっている、胃が機能していない」の否定妄想がみられた。補液と抗うつ薬、抗不安薬を開始した。服薬は出来たが食事への拒否が強く、問い掛けへの返答も乏しかった。13 日後から食事を少量摂取するようになり、21 日後には会話が認められた。症状は急速に回復し、1 ヶ月後は否定妄想も改善された。薬剤性肝障害のため、服薬を中止したが、拒食や否定妄想は再燃しなかった。

【考察】 本症例は、病初期にうつ病の病状を呈し、その後否定妄想が顕著となり CS が考えられた。一般に CS は難治性とされているが、Rugues de Fursac らの双極性障害のうつ病の期間のみ CS が観察された症例や、Enne らの躁病性混合状態に出現した躁病性 CS の報告もある。本症例もその病状が急速に改善したことから双極性障害との関連が考えられた。